一郎と弘子・大東亜戦争秘話

玉山和夫

１９４２年１月１８日

「ただいま」
「おや、一郎。お帰りなさい。何時まで居られるの」
「明日の朝の急行で発ちます」
「何処に行くの」
「呉です。僕は今度海軍の報道班員にさせられました」
「報道班員というのは」
「今までの従軍記者ですが、戦争が始まったので新聞社の記者は軍の管理下で動くことになったのです」
「じゃ日本にいないの」
「軍の命令で動くので、何処にやられるのか判りません。念のため衣料切符があったので、開襟シャツと半ズボンを買ってきました」
「とにかく一郎が帰ってきたのでお父さんも久美子も喜ぶわ。久しぶりに家族四人が揃って食事ね。腕をふるってご馳走を作りますよ」

翌朝まだ日が出ていない薄暗いなか、春日一家が出かけようとしていると、誰かが玄関の外で待っていた。母が声をかけた。
「あら弘子さん、お早いのね」
「おはようございます、一緒に見送りさせて下さい」
弘子は久美子と同級生で、ごく近所に住んでおりよく遊びに来ていた。
皆と駅まで歩いた一郎は五時五十分発の急行に乗ったが、弘子も一緒に乗り込んできて、「名古屋までお供します」と言った。
客車の席に坐った弘子をまじかに見て一郎は思わず身震いした。学生時代に帰省するとよく弘子が遊びに来ていて、妹と一緒にトランプをしたり花火をした時は頭の良い子供だと思っていたが、成長したみずみずしい大人になっていた。弘子は一郎に熱田神宮

のお守りを渡して言った。
「無事お帰りになるのをお待ちしています」
「有難う、僕は報道班員で兵隊のように第一線で戦うわけでないから、あまり心配はしていない。しかし多分南方の戦地に行かされるのだろうから、貴女のくれたお守りは大切に身に着けておきます」
「一郎さんも南方に行かれるのですか。私はこの三月に日本赤十字の看護婦養成所を卒業します。そうしたら私は従軍看護婦を志願するつもりです。それでなくても養成所の講義はこの頃はマラリアやデング熱など熱帯病をよくやっていますから、私たちは南方要員なのかもしれません」
「南方に行かれようだったら僕にも知らせてください。手紙の宛名は行く先に着いてからお知らせします」
「お便り頂ければうれしいですわ」
弘子は列車が名古屋に着くまでの四十分間一郎と話し続け、別れを惜しんで下車して行った。朝早いから養成所の授業には間に合うのであった。

呉に着いた一郎は鎮守府に出頭して海軍報道班員の辞令をもらい、軍属の服装を買い求めた。これからは軍の管理下で動くのである。
数日後駆逐艦に便乗して海南島に行き、海軍警備隊に配属された。警備隊は少数精鋭優良装備の部隊で敵前上陸の猛訓練をやっていた。所属がきまった一郎は早速弘子に葉書を書いたが、警備隊が東南アジア各地の攻撃に間もなく出動したので返事をもらえなかった。

4月11日

一郎は病院船がシンガポールに入港したと知らされたので、港に行って見ると白いスマートな大きい船が停泊していた。船首から船尾まで太いケーブル線が張ってあったのは、磁気機雷対策らしい。案内を請うと病院長が会ってくれた。船内は豪華な作りだった。
「立派な船でしょう。これはもともとオランダの豪華客船オランジェ号だったのです。一九三九年に建造されましたが、欧州の戦乱で乗る人がいなくなり、昨年の四月に病院船に改装されました。豪州に回送され医師や看護婦をのせ、今年三月下旬シドニーを出

港し、エジプトに向かっている途中スラバヤ南方で日本海軍に鹵獲（ろかく）されたのです」
「病院船を鹵獲したのですか」
「その船はダーウインからエジプトに行く豪州兵一個大隊六百六十七名を武器弾薬とともに載せていました。甲板に装甲車まで積んでいましたので、臨検した海軍士官が病院船とは認めないとして合法的に奪い取りました。船はシンガポールに回送され、そこで日本の病院船「しょうせい丸」となり、乗っていた豪州兵は俘虜収容所に移しました。シンガポールでたまたま待機していた我々医師や赤十字看護婦などが乗組みました」
「赤十字看護婦といいますと」
「名古屋で編成した日本赤十字救護班です」
「名古屋と言いますと、ひょっとして飯田弘子という看護婦がおりませんでしょうか」
「いると思います。お知り合いですか」
「はい、私の郷里の岡崎で親しくしていた隣人の娘です」
「それでは早速呼びましょう、今日は全員船におりますから」
まもなく「飯田看護婦参りました」と元気よく弘子があらわれた。
「ああ、弘子さん」
「一郎さん。あ、失礼しました、春日報道員どうしてこちらに」
「僕は新聞記者で軍に徴用され報道員になっているから、取材にきたのだ。とにかく元気な君に会えてうれしい」
二人の様子を見ていた院長が言った。
「飯田看護婦、明日の外出は午前か午後か」
「午前であります」
「春日さん。もし明日午前中お時間がとれましたら、飯田を案内して頂けませんか。明後日からは野戦病院の重症患者を引き取るので忙しくなりますから、その前に交代で引率外出を許すことにしています。春日さんなら土地の様子にお詳しいので安心して案内をお願いできます」
「それは好都合です。ご好意にあまえて明日八時に迎えにあがります」
弘子も一郎も思いがけぬ院長の配慮に感激した。
一郎は院長の案内で船内を見学した。特別食堂を改装した手術室の天井や壁は豪華な装飾が施されていた。院長も言った。

「ここを手術室にするのは勿体無いですが、敵さんがこう作ってしまったのですから止むを得ません。ここの美しい壁も手術を受ける患者の目には見えないでしょう。戦争が終わってこの船が豪華客船にもどるのは何時でしょうか。船の美しさを傷めないよう全員に強く注意しております」

4月12日

翌朝一郎は車をとばして早めに埠頭に行った。弘子はつばの広い帽子に看護婦の制服といういでたちで待っていた

「おはよう、早すぎるかと思ったが丁度よかった」

「一郎さんとお話できるので朝早くから起きていました」

「さて何処に行きますか」

「一郎さんとご一緒できるのなら何処でもよいです」

「観光なら回教寺院などもよいかもしれないが、今でなければ見られないところに案内しようと思うがどうかね」

「おまかせします。私は地理で習ったシンガポールまで来られるなんて予想していませんでした。見るものすべてが珍しいです」

「それでは出かけよう。今北に向って走っている。正面には東西に走っている高地がみえる」

「日本軍はよくここまで来ましたね。私は南方要員といってもせいぜいフイリッピンか南支かと思っていました」

「敵の英軍も日本軍がこんなに早く出てくるとは思わなかったのか、本国がドイツに占領されそうで手が回らなかったのか、防戦の準備が出来ていなかった。

英海軍極東艦隊は三月末のセイロン沖海戦で大敗したので、日本の連合艦隊には到底かなわないと観念してアフリカ東岸まで後退してしまった。それに乗じて日本軍はインド領のアンダマン諸島まで占領した。そしてすぐ交渉団が二式大艇でインド洋を横断してアフリカに近いマダガスカルに行った。僕もその一員だった」

「一郎さん多いに活躍されたのね」

「今フランスはドイツに占領されているが、ドイツに協力するペタン元帥を首相とするビシー政権が治めている。一方フランスから逃げ出したドゴールを首班とする亡命政権がロンドンにいて英米連合軍に支えられている」

「なるほどフランスは二つに分裂しているのね」
「ドゴール派は仏植民地の幹部に英軍と協力して攻めると脅かして支配下に入れようと工作していた。だからもしマダガスカルの仏軍がひそかにドゴール政権に与していれば、我々はすぐ捕虜にされる可能性もあった」
「それは危険な仕事だったのですね」
「しかし現地に着いたらその心配がないことがわかった。というのは、植民地の軍人も役人も、不便な植民地勤務をするのは退職後良い年金をもらって本国でゆったりと暮らしたいからだ。ところが年金の記録はパリーにありドイツ軍が抑えている。それでもしドゴール派に従えば反逆者として記録が抹殺され、楽しみにしていた年金が貰えなくなり困るのだった」
「軍人さんも自分の生活が大切なのね」
「そう、彼らは軍人が職業なのだ。マダガスカルの総督も軍司令官も日本軍が進駐するのを喜んで受け入れると言って、我々を歓待してくれた」
「英軍は抵抗したでしょう」
「日本軍はシンガポール攻撃に参加した二個師団をそちらに振り向ける計画だったが、英軍が先手を打ってかき集めた部隊で上陸してきた。マダガスカルにいたフランス軍は質の悪い現地兵三千人だったから二日間の戦闘で手を上げてしまって、英軍に先に占領されてしまった」
「そうだったのですか」
「日本軍は快速の輸送船が足りないのでそれを集めるのに時間がかかったのだが、ほんとに惜しい事をした。マダガスカルを日本軍がとれば、そこからの爆撃機と潜水艦が補給線を遮断するから、イギリス軍には大打撃だった。エジプトのイギリス軍は名将ロンメルの率いるイツ軍に押されているが、補給がなくなれば敗けるし、中東の石油も使えなくなる。イギリスの敗北は必至だった」
「日本が勝つチャンスだったのに、本当に惜しい事でした」
「ところでここがブキテマ高地だ。マレー半島を南下してきた日本軍がシンガポール島に敵前上陸してこのブキテマ高地まで占領した。そこを取り返そうと英軍は戦車装甲車五十両を先頭に全力をあげて攻めてきたが、日本軍は丁度このあたりで待ち受けていた」
「ここが決戦場だったのですね」
「そうだ、それで日本軍はここに重砲の砲撃を集中するように準備していた。日本軍の

戦車はもっと前にいたが、攻撃されると巧みに後退して英軍の戦車集団をここに連れ込んだ。見てご覧、まだ破壊された戦車がちらばってあるよ」
「ほんとに十両以上ありますね」
「重砲は威力がありあたれば戦車はめちゃめちゃに壊れるし、命中しなくても爆風で戦車の装甲板がへこんで動けなくなる」
「まだ戦車に血のあとが残っています。すさまじい光景ですね」
「ここの戦闘があってからあまり時間がたっていないからまだ生生しいです。僕はあの丘にある観測所から戦闘を見ていたので、詳しい原稿を書いたけど、日本軍のやり方が敵に判るといけないので、しばらくは記事にならない」
「戦場を見せて頂いて本当に有難うございました」
「では僕は今日夕方の出発だし、君の外出時間もあるからそろそろ帰ろう」

5月13日

一郎はマレー半島の北東部ペナン島にいた。対岸に列車が到着し、降りた警備隊員はフェリーで大倉庫へ、航空整備隊員は直ちに飛行場のテント宿舎にむかったが、軍医と看護婦はとりあえず日本軍が接収しているホテルに泊まることになった。看護婦が来たというのは、日本から遥か離れた土地に来て外出も制限されている兵士にとっては大ニュースで、ホテルまで歩く看護婦をひと目みようと沢山の兵が走り出てきて制止されていた。
一郎はホテルの食堂に入った時、五人の看護婦の中に弘子がいるのに気がついた。弘子は喜んで立ち上がり
「春日さんにお目にかかれるとは、運が良かったです。私はドイツ語が少しできたので、今回の派遣員に選ばれました」
「僕も遠くここまでに来たので当分は君に会えないと諦めていた」
「私たち看護婦は何処に行かされるのか知らないまま、ハイフォンで船から下ろされ、そこから列車に乗り続けてここで下ろされて驚いています」
「僕は先発要員だったのでここまで飛行機で来ました。ここは静かでよい所です」
「私たちが来たのはここが戦場になるからでしょうか」
「それは僕も分からないが、ドイツ軍に協力するらしい。ドイツ軍も秘密保持がうるさく、ここを潜水艦の基地としているのもなるべく隠しています。君とゆっくり話したい

が今隊長に呼ばれているので、また後で」
と言って隊長室に行くと。
「春日報道員、急なことだが今夜出発して中部マレーに行ってもらいたい。錫鉱山を接収したいのだがフランスの権益なので交渉がやっかいだ。しかもその鉱山の責任者は興奮するとフランス語しか話さないと言う。接収班長に予定していたフランス語の出来る少尉が急病で仏印に残ってしまったので、君に行ってもらうほか無くなった。班長は関根少尉を当てたがフランス語は出来ない。之は遅延の許されない重要な仕事だ。現地での調整をうまくやれるよう君に補佐してもらいたい」
「承知しました。何時出発ですか」
「午後十時にトラックが出る。すぐ準備してくれ」
あと二時間たらずで出発だ。急いで荷物をまとめた。弘子に会いたいと思ったが、看護婦たちは長い列車の旅で疲れて寝てしまっているので、急いで弘子あての手紙を書いて軍医に託した

5月21日

中部マレーから戻った一郎は不在中のニュースを記事にまとめた。現地での心得など書くことが沢山あったが、夕方には戦陣新聞をガリ版刷りで発行し各部隊に配布した。そのあと乗用車をかりて田舎道をドライブして弘子がいるはずの病院に行った。受付で面会を求めると、すぐ連絡が取れて斉藤軍医の所に案内された。斉藤軍医は
「私はドイツに留学したことがあるのでここに来ました。ここは学校の建物を使った海軍病院の分院ですが、ドイツ軍のために病棟をひとつ確保しています。まだドイツ人の入院患者は三名しかおりませんが、ドイツ人の看護婦が三交代で勤務しています。私は外科が専門ですからドイツ人も診ていて、飯田弘子看護婦は私の診察補助をしています」
「どうしてここにドイツの看護婦がいるのですか」
「彼女らは巡回診療でボルネオに来ているとき戦争が始まり豪州軍に捕まったのですが、エジプトに送られる途中に乗っていた船が日本に鹵獲されたので救出され、ここドイツ兵のための病院に来たのです」
「それはよかったですね」
「今日はこれから病院のパーテイがありますので、何か準備をしているのでしょう。何か作戦が始まれば忙しくなるので暇なうちに全員が集まるパーテイをするのです」

パーテイでドイツ人の医師と五人の看護婦とさらに斉藤医師と五人の日本人看護婦が紹介され、まず日本人が好きな歌ですといって「さくら、さくら」を歌い、次に
「ドイツの皆さんが良くご存知の歌を日本語で歌います」と言って
「兵営の、門の近くの、街灯の下で、君が何時も待っていた」
と歌いだし「リリーマーリン」と一番が終った時、弘子が「みんなで一緒に」と言うと、待ちこがれていたようにドイツ人が「フォーデルカセルン」と歌いだし日独全員の大合唱となった。
「あのリリーマーリンの合唱で何かドイツ人とも心が通ったと感じました」と会が終わってから弘子が一郎に言った。
「この歌はドイツ兵が一番好きな歌だそうです。ここの看護婦たちも好きで良く歌っています。日本の「勝ってくるぞと勇ましく」などという軍歌とは違って恋愛など人間性が出ていていいです」
「ここの病院のドイツ人たちは日本軍をどう評価していますか。イタリーも枢軸軍ですが、あまり強いとはいえません。ヒトラー総統も昔は日本人を蔑視していましたが」
「ここのドイツ人医師はドイツ海軍は潜水艦以外は劣勢なのに、日本海軍は英米海軍をインド洋で徹底的にやっつけたと高く評価して話しています。我々は小人数ですがドイツ人の協力で仕事が気持ちよく出来そうです」
「あなたはドイツ人と仕事をして感じたことがありますか」
「ドイツ人はみなこの戦争には是非勝たなければならないと言っています。ドイツは二十六年前の第一次世界大戦で負けて、賠償やインフレで国民はひどいめに会いました。だからこの戦争は負けられないというのです。ここの看護婦さんだちが献身的に働いているのには頭が下がります」
「ドイツの看護婦さんがよく働くのは赤十字とか職業精神よりもむしろ愛国心によるというのですね」
「そうです。私たちは単純に日本は戦争に勝つものだと思っていました。日本が負けるなどとは口に出せませんでした。しかしここの医者や年長の看護婦さんたちは戦争に負ける惨めさを体験していますから芯が強いです」
「そういうドイツ魂に感化されてか君も一段と立派な看護婦になったようだ」
「春日さんも立派な仕事をされていらっしゃるのは素晴らしいです」
ドイツ人の看護婦が何人か走っていった。そのうちの一人が声をかけた。

「ヒロコ、負傷者が何人か来るよ」
弘子は一郎に申し訳無さそうに言った。
「わたしも斉藤医師の補助をするため救急処置室に行かなければなりません。今夜は徹夜になるかもしれません。春日さんにお目にかかれて楽しいでした。では失礼します」
「僕も楽しかった。ぜひまた会おう」

6月12日

「日本兵はどれぐらい入院していますか」
久しぶりに病院を訪ねた一郎は斉藤医師に聞いた。
「航空機搭乗員が十名と警備隊員が五名です」
「思ったより少ないですね。作戦が順調に行っているせいですね」
「警備隊員は後送に時間がかかるので、もう少し増えるかもしれません」
「患者と話してもよいでしょうか」
「いいですよ、全員症状が何とか安定していますから誰とでもどうぞ」
一郎は日本人病棟に入院している攻撃機の搭乗員に話しかけた
「いかがですか。報道班員の春日です。よかったら少しお話を伺えますか」
「はい。日本の看護婦が良くしてくれるのでかなり回復しました。話は充分できますが、まず戦況がどうなっているのか教えてください」
「日本軍はビルマ全部を占領して、イギリス軍の残存兵はやっとのことでインドまで逃げた。英海軍はセイロン島沖海戦で敗れアフリカまで後退した。日本は東南アジア全域を占領したが、英軍は本国が危ないのでこちらに攻勢をかける余裕はない。日本は大東亜共栄圏の確立に努めている。海軍は米国との戦闘に備えている」
「ドイツ軍はどうですか」
「ドイツ軍はアフリカでイギリス軍を破り、エジプトに迫っている。ドイツのロンメル将軍は天才的な名将でイギリス兵も怖れている」
「私はセイロン沖海戦に参加したのです。四月一日から作戦開始と聞いていましたので我々も早く攻撃に参加したいと張り切っていました。やっと三日に敵を発見して総攻撃の命令が出ました。私のいた編隊は艦攻十八機とゼロ戦九機でした。目的の海面に近づくと空母一隻と巡洋艦が二隻見えました」
「敵の防御はどうだった」

「敵戦闘機はゼロ戦がかたずけてくれたので、私の機も作戦どおり航空母艦に向って急降下しました。機関砲の火の線が我々に向ってきましたがあたりません。爆弾を投下して機体を引き起こし、私が後部席から振り返って確認し「命中」と怒鳴った時、バンバンと機関砲弾が機体に中る音がしたと同時に右の腿にひどい痛みがはしりました。血がどくどく出たので三角巾でしばったのですが、血はなかなか止まりません。首に巻いていたマフラーでさらにしばったら出血は少し減りましたが止まらず、体もぐたっとなりました。母艦に帰りつくまでの時間は長く、そのうちに意識が朦朧としてきました。着艦した時は意識がなく覚えていませんが、戦友がすぐ輸血してくれて助かったのは有り難いことでした」

「そうでしたか。その攻撃では十七発空母に命中させています。九十五パーセントという素晴しい命中率でした」

「それを聞いて安心しました。海軍航空隊の実力です」

「まだ傷は痛むのでしょう」

「かなり良くなりました。それにここの飯田看護婦は私の村の近くの岡崎の出身で話が合います」

「それはよかった。僕の郷里は岡崎です」

「飯田さんも同郷の報道班員と会えれば喜ぶでしょう」

その時斉藤医師がきたので一郎が聞いた。

「お忙しいようですが、状況はどうでしょうか」

「日本軍がビルマ西部に上陸した時激戦があったらしく負傷者が次々に此処にも送られてきましたが、その大部分は退院しました」

「今では日本軍がビルマ北部まで進撃しています。英軍は退却また退却で混乱しています。わが軍の損害は少なくなるでしょう」

「それを聞いて安心しました。私は日本病棟の回診を終わったので一休みします。十分後に僕が手術したドイツ水兵の回診を始めますので、それまで飯田とお話しください」

「有難うございます」

「久しぶりにお目にかかれましたが、春日報道員お元気で何よりです」

「僕は敵前上陸の第一陣としてビルマの西端のアキアブに行ったが、ここはインドにすぐのところだが、敵の反撃が遅れたので無事帰ってこれた。ここは忙しそうだが弘子さんも体に気をつけて」

「重傷者の手当ては時間との戦いで忙しいのは当然ですが、私は相変わらず元気に働いています。今日は新患が少なく、ゆっくり出来るのです。良い時においで下さいました」
「ところで日本からの手紙が来ていますか」
「四月に呉を出てから手紙はひとつも受け取っていません」
「手紙は船便なので時間がかかるが、僕には本社からの連絡便が飛行機で送られてきていて、通信部からお宅の皆さまはお元気だと知らせてきました」
「有難うございます。離れた所にいますと両親のことが気にかかりますが、お知らせ頂いて安心しました」
「これは今日の連絡便で届いた内地の新聞です。一部ですが差し上げます」
「有難うございます。日本の新聞は始めてで看護婦の皆も喜びます」
「僕は明日から新作戦に同行しますので、しばらく会えないかもしれません。その前に君に会えてよかった」
「ご無事を祈ります。又お会いしたいです」

8月11日

「今日の会議は早く終わったね」
サイゴンに来た一郎が仏印新聞のフランス人記者に話しかけた。
「大東亜共栄圏は日本が盟主としてビルマ・インドネシアなどは独立させるが、インドシナは引続きフランスの領土として認めると聞いて総督などフランス人は安心した」
「日本は開戦前に仏印に進駐した時の日仏協定を再確認したので、現状維持になった」
「ところで日本軍が予想外に強かった理由は何だろうか」
「それは零式戦闘機、ゼロ戦の航続距離が英米のどの戦闘機よりも長かったことだ。遠距離の攻撃でもゼロ戦が付いてゆき、敵の防御戦闘機を討ち落したから、爆撃機は妨害を受けず敵を確実に攻撃できた。一方敵の爆撃機は遠くには戦闘機が付いて来れないので、待ち受けていたゼロ戦に落とされてしまった。日本海軍は航空機が海戦を左右することを予測していた」
「全くそうだ、イギリスの提督は大艦巨砲主義に凝り固まっていて、飛行機が戦艦を沈めることなどありえないと思っていたから負けたのだ。それに日本の陸軍も活躍した」
「ところで僕はマレーの錫鉱山に取材に行くが、君も一緒に行かないか」
「あそこはフランスの権益だから、取材ができれば特種になるが、僕は許可が無ければ

国外に出ることは出来ないのだ」
「それについては僕が報道部とかけあって許可ととる。鉱山主は同国人の君が行けば喜んで話してくれるよ。どう、共同取材にしないか」
「賛成だ。進攻作戦中はうるさい検閲があったが、今は楽になった」
「日仏共同取材は始めてだ。双方の見方を総合して真相に迫れる。よい記事が書けるぞ」

「それから君との共同取材が終わったら、僕はペナンに急行してヒロコに結婚を申し込む。ヒロコはとても魅力的でしかも僕に厚意をもっている。ヒロコは海軍病院のドイツ兵病棟で看護婦として働いているが、本国帰還が決まったから、結婚する気になると思うのだ」
「僕なら取材なんか後にして、まっすぐ彼女に会いに行くがね」
「僕には君との共同取材が重要なんだ。之が先だ」
「さすがに君は真面目な日本人だ。感心するよ。こうゆう君ならヒロコは勿論喜んで承諾するだろう。お二人の幸福を祈る」